

修士論文（要旨）

2020年1月

日本語ボランティアの動機の変化とビリーフの形成に関する考察  
ー地域日本語教室におけるボランティアを対象にー

指導 齋藤 伸子 教授

言語教育研究科

日本語教育専攻

218J3008

姚 霧竹

Master' s Thesis(Abstract)

January 2020

Research on the Change of Motivation and Formation of Beliefs of Japanese  
Volunteers in Local Japanese Language Classrooms

Wuzhu Yao

218J3008

Master' s Program in Japanese Language Education

Graduate School of Language Education

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Nobuko Saito

## 目次

第1章 研究背景.....	1
第2章 先行研究.....	3
2.1 地域日本語教室の展開 .....	3
2.2 ボランティアの定義 .....	4
2.3 ボランティアの動機 .....	5
2.4 日本語ボランティアのビリーフに関する研究 .....	6
第3章 研究方法.....	9
3.1 研究課題 .....	9
3.2 調査方法 .....	9
3.3 分析方法 .....	10
第4章 調査1 .....	12
4.1 SFさんのストーリーライン .....	12
4.2 動機についての分析 .....	13
4.3 ビリーフについての分析 .....	13
第5章 調査2 .....	15
5.1 調査協力者 .....	15
5.1.1 SMさんの基本情報 .....	15
5.1.2 YFさんの基本情報 .....	16
5.1.3 NFさんの基本情報 .....	17
5.2 カテゴリーの生成 .....	17
5.3 〈ビリーフの形成過程〉 .....	19
5.3.1 [ボランティア活動を始める時の心構え] .....	19
5.3.2 [ボランティアのあり方に対する意識の変化] .....	21
5.3.3 [意識と一貫する行動] .....	25
5.3.4 [定着した考え方] .....	30
5.4 〈動機の変化〉 .....	32
5.4.1 [ボランティアの開始動機] .....	32
5.4.2 [活動を続けるための継続動機] .....	34
5.4.3 [動機の変化に影響を与える因子] .....	37
5.4.4 [自らの変化に対する意識] .....	41
5.5 〈授業の形〉 .....	43
5.5.1 [様々な道具や生教材の使用] .....	43
5.5.2 [状況による柔軟な対応] .....	46
第6章 考察.....	50
6.1 概念図とストーリーライン .....	50
6.2 研究課題1 .....	51
6.2.1 ボランティアの開始動機についての考察 .....	51
6.2.2 動機の変化過程 .....	52
6.2.3 ボランティアの継続動機についての考察 .....	55

6.3 研究課題 2 .....	56
6.4 研究課題 3 .....	58
第7章 おわりに.....	61

参考文献  
資料

## 要旨

外国人労働者の来日が年々増えることにより、日本で生活するために必要である日本語への支援は徐々に社会問題になってくる。その中で、「地域日本語教室」という地域住民が支援者の役目を担っている場所が各地域で建てられた。池上(2007)は、地域日本語教育を『地域在住の「外国人」に対して基礎的な日本語や生活情報を、地域住民が中心となってボランティアに支援する活動』(池上, 2007)と定義している。地域日本語教室の学習者についての研究はあるが、日本人のボランティアについて心理的な側面からの研究はまだ少ない。本稿は、日本語ボランティアの動機の変化とビリーフの形成過程について考察することを目的として、日本語ボランティアの人材育成と確保に貢献したいと思う。

ボランティアの動機について、興梠(2003)の研究によると、ボランティア活動に参加する動機は“外発的動機”(問題解決型動機)と“内発的動機”(自己実現型動機)に分けられるという。現代では、「社会問題への関心」などの“外発性”を持つ動機より、「自分の発見」などの“自発性”を持つ動機が上回っているという。さらに、ボランティア活動に“貢献”と“学び”の両義的な意味を求める「互酬性」の意識を持つ人々も少なくないという。興梠(2003)の研究を参考として、本稿の調査協力者の動機について分析する時に、この3つの分類を使った。本稿では日本語ボランティアのビリーフは日本語ボランティアのアイデンティティを基に、地域日本語教育に対して抱く信念であるというように定義する。ボランティアのビリーフについての研究が少ないため、本稿では第二言語教育における教師ビリーフの研究を行う Richards and Lockhart (1994)の研究結果を参考にし、日本語ボランティアのビリーフの形成についての分析する時に、ビリーフの起源としての「言語学習者としての自身の経験」、「成功体験」、「確立した教え方」、「個人的な要因」、「教育または研究をベースとした原理」、「アプローチや方法論から得られた原理」という6点に当てはめた。また、星(2015)の研究によると、日本語ボランティアのビリーフは過去の教育や仕事などの体験を源とする【過去リソース】と、現在自分の周囲に存在する人や新規の語学学習、その他各種講座、本などの【外部リソース】が利用され、形作られているという。その【過去リソース】と【外部リソース】というカテゴリーを参考にし、本稿の調査協力者のビリーフの形成について分析した。

本稿は、東京都内のある地域日本語教室に参加している4人を調査協力者にインタビュー調査を行い、MGTAという分析方法を用いて研究を行った。調査1は若い世代のSFさんに対してインタビュー調査を行った。その結果、動機の変化について、外国人と交流したいという「内発的動機」からボランティア活動を始めたが、活動は予想と違うと感じたので途中で一度諦めようと考えたことがあり、最後に友達が作られたり会話の面白さを感じたりしたことにより、「内発的動機」によって活動を継続していることが分かった。ビリーフの形成について、SFさんは日本語のボランティアとしてどのような行動を取るのが適切であるか迷っており、自分なりのやり方がまだはっきり決まっていない状況である。結果から見ると、SFさんの動機は少し変わってきたが、未だにボランティア活動に対して一体どのように進めるべきなのか、どのように外国人に接するのが適当であるのかについてはまだ悩んでいる。それは、1年半の活動期間は短いので、ボランティアとして全くの初心者から活動をはじめたら、その短期間で自らのビリーフを形作るのは難しいからだと判断できる。そのため、ボランティア経験1年半では、動機の変化やボランティアビリーフ

の形成過程の分析は難しいことがわかったので、調査2では、活動期間が長い協力者のインタビューデータの分析を行う。

調査2の結果、動機の変化について、ボランティアの動機は「外発的動機」または「互酬性」を持つ動機によってはじまり、活動の継続に従って「内発的動機」が多く現れ、単一的な動機によりボランティア活動を継続するのは難しいので、最後に「互酬性」を持つ動機によって活動を継続する傾向があることがわかった。また、ボランティア活動を継続する動機へ変化しているが、ボランティア活動の開始動機がなくなるのではなく、活動を継続する動機の中に含まれて続けて作用している。ビリーフの形成については、ボランティア活動の初期に心構えを持つ人は最初の段階でそれに影響されやすい。その後、ボランティア活動に慣れてから、様々な外部因子に接触し、それらの外部因子の影響を受ける。それらの外部因子はビリーフの形成過程に影響を与え、ボランティアをはじめたころの心構えから固まっていき、ビリーフが形成される。その過程の中で、自らの心構えと一致する行動を繰り返すという行為は、ビリーフが固まるという結果に至る重要なことである。また、外部因子によってボランティア活動のやり方も変わるので、変わったやり方を繰り返すと、初期の心構えから離れて新たな考え方が生じ、別のビリーフが形成されるまでに至る。

本稿の目的は日本語ボランティアの人材の育成と確保することに貢献することである。結果から見ると、3人の動機が解明することにより、日本語ボランティア活動に獲得したいこと、あるいは貢献したいことを明らかにし、ボランティアの訴求がわかれば、日本語ボランティアの人材確保に貢献ができる。また、ボランティアのビリーフは活動にどのように表現するのがわかることにより、ボランティアのビリーフの多様性を確保することが必要であろうという考えを日本語ボランティアの育成に貢献できると思う。

今後の課題として、縦断的な研究を試み、長期間にわたって日本語ボランティアに対して定期的にインタビューをし、その当時の状態を正確に把握できれば、インタビューのデータの信頼性がさらに上がると考えられる。また、日本語ボランティアで数少ない若い世代の人々を対象を絞り、日本語ボランティアの動機の変化とビリーフの形成にはどのような傾向があるのかについて解明していきたい。今後活躍が期待される日本語ボランティアの育成のためにさらに貢献できると考えるからである。

## 参考文献

- 秋田喜代美(1994)「熟練教師と初認教師の比較研究」稲垣忠彦・久富善之編『日本の教師文化』, pp.84-96, 東京大学出版会.
- 新崎国広(2005)「第1章 ボランティア活動とは」守本友美・河内昌彦・立石宏昭編著『ボランティアのすすめー基礎から実践までー』, p.26, ミネルヴァ書房.
- 入江幸男(1999)「ボランティアの思想」内海成治・入江幸男・水野義之編『ボランティア学を学ぶ人のために』, pp.4-21, 世界思想社.
- 池上摩希子(2007)「「地域日本語教育」という課題：理念から内容と方法へ向けて」, 『早稲田大学日本語教育研究センター紀要』, pp.105-117, 早稲田大学日本語教育研究センター.
- 岡田涼・中谷素之(2006)「動機づけスタイルが課題への興味に及ぼす影響ー自己決定理論の枠組みからー」, 『教育心理学研究』, 54(1), pp.1-11, 日本教育心理学会.
- 木下康仁(2003)『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い』, 弘文堂.
- (2007)『ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』, 弘文堂.
- (2007)「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) の分析技法」, 『富山大学看護学会誌』, pp. 1-10, 富山大学看護学会編集委員会.
- 久野弓枝(2002)「地域日本語ボランティア教室の限界と可能性」, 『北海道大学大学院教育学研究科紀要』, 86, pp. 251-264.
- (2013)「日本語教室における非母語話者ボランティアの社会参加に至るまでのライフストーリー研究：社会的ネットワークとアイデンティティの変容に着目して」, 『札幌大学総合研究』, (4), pp. 13-31, 札幌大学外国語学部.
- 小島佳子(2014)「日本語母語話者が地域日本語教室に参加する意義：日本語ボランティアの活動参加継続につながる動機付け」, 『神奈川県立国際言語文化アカデミア紀要』 3(0), pp.101-110.
- 新庄あいみ(2008)「地域日本語活動の現場から：ボランティアの意識における、「やりがい」の循環と「教えること」の固定化」『多文化社会と留学生交流：大阪大学留学生センター研究論集.』, pp.87-97.
- 富川拓・大東貢生(2004)「日本語教育ボランティアにおけるボランティアイメージと動機について」, 『佛大社会学』 29, pp.51-59, 佛教大学.
- 東京日本語ボランティア・ネットワーク(2018)『日本語ボランティア活動 実態調査』.
- 星摩美(2015)「「地域日本語教育」にかかわる人々の活動を形作る意識とビリーフ」, 『人間社会環境研究』, 29, pp. 17-34, 金沢大学大学院人間社会環境研究科.
- (2017)「日本語教師のビリーフ研究」, 『日本語教育』, 165, pp. 89-104, 日本語教育学会.
- 文化審議会国語分科会日本語教育小委員会(2015)「地域における日本語教育の実施体制について 中間まとめ(「論点7 日本語教育のボランティアについて」)」.
- 文化審議会国語分科会(2016)「地域における日本語教育の推進に向けて：地域における日本語教育の実施体制及び日本語教育に関する調査の共通利用項目について」.

- 文化庁(2004)『地域日本語学習支援の充実：共に育む地域社会の構築へ向けて』，国立印刷局.
- 森本郁代(2009)「地域日本語教育の批判的再検討 ―ボランティアの語りに見られるカテゴリー化を通して―」，野呂佳代子・山下仁編著『「正しさ」への問い』，pp.215-247，三元社.
- 美濃哲郎・大石史博(2012)「動機づけ・感情」，『スタディガイド心理学 第2版』，pp.63-77，ナカニシヤ出版.
- 山田智久(2014)「教師のビリーフの変化要因についての考察：二名の日本語教師へのPAC分析調査結果の比較から」，『日本語教育』，vol.157，pp.32-46，日本語教育学会.
- (2014)「教師の成長におけるビリーフの変化」，北海道大学博士論文.
- 徳田(2007)「7 半構造化インタビュー」，やまだようこ編『質的心理学の方法 ―語りをきく―』，pp.100-113，新曜社.
- Barcelos, A. M. F. (2000). Understanding teachers' and students' language learning beliefs in experience: a Deweyan approach. Tuscaloosa. College of Education, The University of Alabama.
- Richards, J. C. & Lockhart, C. (1994). Reflective teaching in second language classrooms. USA: Cambridge Language Education.
- Norton, B. (2000). Identity and language learning: Gender, ethnicity and educational change. London: Person Rducation.

#### 参考 URL

- 「人口推計」(総務省統計局) (<http://www.stat.go.jp/data/jinsui/riyou.html>) (2019年5月22日に利用)
- 「在留外国人統計(旧登録外国人統計)」(総務省司法法制部) (<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&toukei=00250012>) (2019年5月17日に利用)
- 文化庁(2001)「日本語に対する在住外国人の意識に関する実態調査」(URL：[http://www.bunka.go.jp/tokei\\_hakusho\\_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku\\_jittai/zaiju\\_gaikokujin.html](http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku_jittai/zaiju_gaikokujin.html)) (2019年6月6日に利用)
- 厚生労働省(2007)「ボランティアについて」(URL：[https://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/12/dl/s1203-5e\\_0001.pdf](https://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/12/dl/s1203-5e_0001.pdf)) (2019年6月11日に利用)